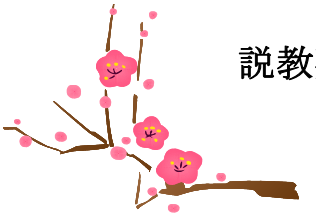

説教要旨　「心折れそうな現実に」

ルカによる福音書１８章１～８節

イエス様は弟子たちに、あるたとえを話されました。一人のやもめが「不正な裁判官」に裁判を行うよう訴えると言うものです。この裁判官は「神を畏れず人を人とも思わない」（2 節）者でした。裁判官はやもめの訴えをしばらくの間は取り合おうとしませんでした。それはこのやもめの訴えが不当だからと退けたのではなく、この訴えを取り上げても自分に何の得にもならないからです。それは裁判官という職責に背く行為ですが、この不正な裁判官を裁くことができる者はこの町にはいないのです。それができるのは神様だけですが、彼はその神を畏れていない、つまり神の裁きなどないと思っているのです。だから彼はもはや怖いものなしです。「神を畏れず人を人とも思わない」裁判官が支配するこの町において、やもめの訴えはことごとく無視され、取り合ってもらえないのです。それはまさに気落ちせずにはいられないような現実であり、もう訴え出ても無駄だと、諦めてしまっても不思議ではない状況です。しかしたとえ不正な裁判官であっても、求め続ければ根負けして裁きを行うこともある。ましてや神は「昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか」（7 節）。そんなことは決してなく、「神は速やかに裁いてくださる」（8 節）のです。神様は必ず正しい裁きを行って下さり、神の国を完成させて下さる、そのことを信じて、神を恐れず人を人とも思わないような力が支配している現実の中でも、気を落とさずに絶えず祈りなさい。イエス様は弟子たちにそう語り掛けています。

神を畏れず人を人とも思わない力が支配しているこの世界には不正に満ちています。憎み争い、様々な隔たりがある。思想、宗教、歴史観、国籍。様々な隔たりがわたしたちの中にあり、そのような中でなにをやっても無駄だと、何も変わらない、と諦めてしまいそうになります。しかし、神の公正なる裁きは必ず行われる。私たちはそう信じ、たとえ心折れそうな現実の中にあっても、神を畏れ、人を人として思い、絶えず祈り続けて参りましょう。

（２０２０・３・８　説教者：稲垣真実）